

スペイン語の否定の移動に関する諸条件の考察

田林 洋一

Some Conditions of Negative-transportation in Spanish

YOUICHI TABAYASHI

Este trabajo tiene por objeto analizar los fenómenos del transporte de la negación (TN) en español, especialmente desde la perspectiva sintáctica, semántica y pragmática.

En investigaciones anteriores, el TN solo estaba considerado desde el punto de la vista sintáctica. Sin embargo, estas bases teóricas se consideraban en la estructura profunda, que en actual se trata en la categoría interpretativa. Este trabajo explica el comportamiento sintáctico, semántico y pragmático del TN distinguiendo los casos en que la oración subordinada contenga palabras negativas o no.

Asimismo, se proponen tres condiciones sobre el carácter de predicados a los que se pueden aplicar el TN: Primero, los predicados que contienen una presuposición. Segundo, los que tienen la tendencia a introducir un infinitivo. Tercero, los que no contienen la creencia del que habla.

1. 序

本稿では、スペイン語の否定の移動 (transporte de la negación、以下 TN) と呼ばれる現象の統語的・意味的・語用論的側面について若干の考察を加えることを目的とする¹。まず、以下の文を参照²。

- (1) a. 私は、彼が良い人でないと思う。
b. 私は、彼が良い人だとは思わない。
- (2) a. I think that Tom is not a nice person.

- b. I don't think that Tom is a nice person.
- (3) a. Cree que no vienen.
b. No cree que vengan.
- (4) No cree que vienen.

TNとは、(3) のように命題の真理値が変わらない³（発話内容が同じ）範囲で従属節にある否定語が主節に移動する現象であり、(1) や (2) のようにスペイン語以外の言語にも生じる。また、(3b) のように否定の移動を適用することで従属節の法が変わる場合もあるが、(4) のように従属節の法が変わらない用法も容認される⁴。

TNを適用すると命題の真理値が変わる場合はTN文とは呼ばない。本稿では、TN文を「TNの操作を適用した後も、適用前の文と真理値が変わらないペアの文」と暫定的に定義する。

- (5) a. Repito que no lo haces muy bien.
b. No repito que lo hagas muy bien.
- (6) a. Lamento que no vengas.
b. No lamento que vengas.

Sánchez López (1999 : 2611)

(5) と (6) のそれぞれのペアは、否定語が主節に移動することによって真理値が変わるので、TN文ではない。しかし、(1) ~ (3) の各ペアが意味的に等価というわけではない。この点については語用論的側面を扱う第4節で詳しく論じる。

2. TNの統語的側面

本節ではTNの統語的側面について、Rivero (1977) を中心に概観し、次に従属節に否定語が出現している場合を独自に考察する。

2. 1 概観

初期の研究では、TNは統語的変形とみなされていた。

- (7) a. Los jueces creen que el equipo ruso no ganará.
 b. Los jueces no creen que el equipo ruso gane.

Rivero (1977 : 21)

(8) Transporte de la Negación (TN)

	X -	o [SN -	V -	_{SN} [NEG -	O] _{SN}]	o -	Y
IE:	1	2	3	4	5	6	
CE:	1	4+2	3	∅	5	6	

Rivero (1977 : 23)

Riveroは、(7a) は否定語が従属節に留まっている状態で、(7a) に (8) のTNの変形という統語的操作が文の基底構造にかかると否定語が従属節から主節に移動して (7b) に変換されると主張する。その根拠として、①点的な動詞と共起する副詞hastaの振る舞い、②en absolutoの振る舞い、③palabra deやgota deのような最小量を表す否定極性項目 (término de polaridad negativa、以下TPN)、④文の代名詞化 (pronominalización de oración) を挙げている。まず、点的な動詞と共起する副詞hastaの振る舞いから見る。

- (9) a. *El tren llegó hasta las siete de la tarde.
 b. El tren no llegó hasta las siete de la tarde.
 (10) a. Tu padre quiere que el tren no llegue hasta las siete de la tarde.
 b. Tu padre no quiere que el tren llegue hasta las siete de la tarde.
 c. *Tu padre quiere que el tren llegue hasta las siete de la tarde.

Rivero (1977 : 25)

(9) は、副詞hastaが同一節内で否定環境を要求することを示している (即ち、点的な動詞と共起する副詞hastaはTPNである)。(10b) は (10a) のように同一節内に否定語が出現していないにもかかわらず、従属節内で副詞hastaの出現を容認するため、基底構造では否定語は従属節内にある (同一節内に否定語が出現していない (10c) は副詞hastaの出現を容認しない)。従って、(10b) はもともと (10a) を基盤としている。TNを拒絶する動詞

句tratar deの場合、(11) のペアが示すように同一節内に否定語がないと副詞hastaは出現できない。

- (11) a. Tu padre trata de que el tren no llegue hasta las siete de la tarde.
b. *Tu padre no trata de que el tren llegue hasta las siete de la tarde.

Rivero (1977 : 26)

次に②について検討する。en absolutoは、通常否定環境のみに生起するという点で副詞hastaと似る⁵。

- (12) a. Mi hermano cree que no como en absoluto.
b. Mi hermano no cree que coma en absoluto.
c. *Mi hermano cree que como en absoluto.
- (13) a. Me di cuenta de que el niño no cantaba en absoluto.
b. *No me di cuenta de que el niño cantara en absoluto.

Rivero (1977 : 27)

TNを許容する動詞creerでは、(12b) のように否定語が同一節内になくとも(12a) のように従属節内でen absolutoが出現しうる。一方、TNを拒絶する動詞句darse cuenta deは、(13b) が示すように同一節内に否定語が出現していない状態ではen absolutoは出現できない。同様に、③の最小量を表すTPNについて論じる。

- (14) a. No probó gota de agua.
b. *Probó gota de agua.
- (15) a. No dijo palabra de lo ocurrido.
b. *Dijo palabra de lo ocurrido.

Rivero (1977 : 27)

(14)、(15) では、gota de及びpalabra deはともに否定環境を要求することが示される。以上を踏まえた上で、以下の文を参照。

- (16) a. Creo que no entiende palabra de inglés.
b. No creo que entienda palabra de inglés.

- (17) a. Creo que no probó gota de agua.
b. No creo que probara gota de agua.

Rivero (1977 : 27)

- (18) a. Quiero que no muevas un dedo por él.
b. No quiero que muevas un dedo por él.
(19) a. Me parece que no tiene el menor interés en ello.
b. No me parece que tenga el menor interés en ello.

Bosque (1980 : 52)

動詞*creer*が主節にある(16b)及び(17b)は、(16a)及び(17a)の基底構造にTNの変形がかかり、同一節内に否定語がなくとも最小量を表すTPN (*palabra de*及び*gota de*)の出現を許容する。(18)の*mover un dedo*及び(19)の*el menor interés*も同様である。しかし、TNを拒絶する動詞*explicar*は、同一節内に否定語と最小量を表すTPNの両者が共起しなければ非文となる。

- (20) a. Les expliqué que no hablaba palabra de inglés.
b. *No les expliqué que hablaba palabra de inglés.

Rivero (1977 : 27)

①～③は従属節内に否定語が出現していないにもかかわらずTPNが出現しているため、基底構造では従属節内に否定要素があるという説明原理である⁶。しかし、全てのTPNが否定要素のない従属節に出現するとは限らない。

- (21) a. Me parece que Margarita no ha llegado todavía.
b. *No me parece que Margarita haya llegado todavía.
(22) a. Cree que no me llevas nunca al cine.
b. *No cree que me lleves nunca al cine.

(21)の*parecer*、(22)の*creer*ともTNを許容する動詞であるが、従属節にTPNである*todavía*と*nunca*が出現した場合は非文となる。

次に④の文の代名詞化について検討する。

- (23) a. Juan cree que María es guapa, pero no está seguro de ello.
b. Juan cree que María es guapa, pero no está seguro de que María

sea guapa.

- (24) a. Juan cree que María no es guapa, pero no está seguro de ello.
b. Juan cree que María no es guapa, pero no está seguro de que María no sea guapa.
- (25) a. Juan no cree que María es guapa, pero no está seguro de ello.
b. Juan no cree que María es guapa, pero no está seguro de que María no sea guapa.
- (26) Juan no cree que María es guapa, pero no está seguro de que María sea guapa.

Rivero (1977 : 28)

(23b) のque María sea guapaは、(23a) では文の代名詞化によりelloとして具現化される。(24a) のelloは(24b) が示すように、que María no sea guapaを意味し、結果として(24)の真理値は同一である。一方、TNを適用した(25a)のelloは、その従属節であるque María es guapaを意味するのではなく、(25b) が示すようにTNが適用される前のque María no sea guapaを意味する。従って、(25a)は(25b)と等価であり、(26)とは反対の意味を持つ。

Ross (1969) は、更に省略文からTNの妥当性を説明している⁷。

- (27) a. Creo que María no se va de vacaciones y te puedo decir por qué.
b. No creo que María se vaya de vacaciones y te puedo decir por qué.

(27a) はTNが適用される前の文であり、por qué以下は命題María no se va de vacacionesが省略されている。TNが適用された(27b)では、por qué以下に省略された命題は否定極性を持つMaría no se va de vacacionesであり、(27a)の省略箇所と等価である⁸。

この代名詞化によるTNの説明は、既にLindholm (1969 : 154) がTNが統合的変形であることの根拠として取り上げている。

- (28) I don't think Bill paid his taxes and Mary is quite sure of it.

(it = Bill didn't pay his taxes)

上記の例文に出現する代名詞itは否定要素が入った補文の内容を正確に写し取らねばならない。しかし、代名詞化が統語的規則の基底構造で行われているという前提にはBach - Peters paradoxと呼ばれる問題がある (Bach (1979)、大塚 (1982 : 957)、安藤 (1993 : 20) 他を参照)。

(29) The man who deserves it will get the prize he wants.

安藤 (1993 : 20)

上の文で出現する代名詞it及びheの先行詞は、それぞれthe prize he wantsとthe man who deserves itである。しかし、後者を前者に代入すると、the prize the man who deserves it wantsという分が出現し、無限に代名詞が現れることになる。

従って、代名詞化によるTNの説明は、代名詞化が基底構造における変形規則に則ったものである以上、説明的妥当性を失う⁹。前述の①～③のTPNの出現条件を根拠にしたTNの変形規則も、否定の作用域とTPNの決定が解釈部門でなされていることを考えると、やはり妥当性を失う。

更にTNの統語的変形だけでなく、意味的側面を重視しなければならない現象にTNの循環的適用が挙げられる。

(30) a. Creo que Luis quiere que Fabián no hable en absoluto.

b. Creo que Luis no quiere que Fabián hable en absoluto.

c. No creo que Luis quiera que Fabián hable en absoluto.

Rivero (1977 : 31)

(30) の真理値は等価である。原則としてTNは循環的に適用されるので、節間にTNを拒絶する動詞が置かれてはならない。

(31) a. Yo creo que Luis se enteró de que Juan no habla palabra de francés.

b. *Yo creo que Luis no se enteró de que Juan habla palabra de francés.

c. *Yo no creo que Luis se enterara de que Juan habla palabra de

francés.

Rivero (1977 : 34)

(31b) は動詞 *enterarse* が TN を拒絶するため、(31c) はその *enterarse* が主節と従属節の間に介入しているため、それぞれ非文となる¹⁰。しかし、以下の文の動詞は全て TN を許容するが、循環適用することで非文となる。

(31) *No quiero que Juan crea que Pedro se vaya hasta el sábado.

Horn (1971)

以上、従属節に出現する TPN、代名詞化、循環適用の三つの観点の問題点を指摘した。これら全ての問題点は、畢竟 TN が単に統語的変形の規則の一種であるとみなしていることに起因しており、TN を分析するには統語以外にも動詞の意味や文脈を考慮に入れる必要があることが分かる¹¹。

2. 2 従属節に否定語が出現する場合

本節では、TN において従属節に否定語が出現する場合を検討する。

スペイン語の否定語は閉じた類であり、no の他に *nadie*, *nada*, *nunca*, *jamás*, *ninguno* / *a*, *tampoco*, *ni* の合計 8 つがある。

(32) a. *Creo que no viene nadie.*

b. *No creo que venga nadie.*

(33) *Nadie cree que no venga.*

(34) a. *Cree que nunca viene nadie.*

b. *Nunca cree que venga nadie.*

(35) *Nadie cree que nunca venga.*

(32b) は、(32a) に TN が適用されて、no と *nadie* のうち no だけが主節に移動したものである。この時、(32a) の *nadie* を主節に移動させて (33) のようにすると、(32) とは真理値が異なるために適格な TN 文とはならない。否定語が動詞の前に置かれている文では、動詞の後に出現する no 以外の否定語 ((32a) の場合は *nadie*) は否定語の特徴を持つのではなく、TPN の特徴を持つ。従って、*nadie* は「TPN として働く否定語」ということができる。(34a)

はTNを適用すると、動詞の後に置かれた（即ちTPNとして働く）nadieではなく、動詞の前に置かれるnuncaが主節に移動し、(34b) のようになることが予想される。この場合、真理値は変わらず、(34a) は「彼は決して誰も来ないと思う」、(34b) は「彼は誰かが来るとは決して思わない」と解釈される¹²。一方、(35) はnadieが主節に移動した場合であるが、その意味は(34)と異なり「決して来ないとは誰も思わない」という二重否定になる。(32)と(34)の各文には否定要素は一つしか存在していないため、否定文である。

主節と従属節が両方とも否定要素を持っている場合、その主節の否定要素はTNの影響を受けたものではない（即ちTN文ではない）。

(36) a. No creo que no venga nadie.

b. Nunca creo que no venga nadie.

(36a) には主節と従属節の両方に否定語がある。もしこれがTNの適用を受けたものであれば、基底構造は(37a) のようであればならないが、同一節内に否定語が二つ出現しているため非文となる。なお、同様に(36b)もTN文であるならば、基底構造に(37b) のような文が作られなければならないが、やはり非文となる。

(37) a. *Creo que no no viene nadie.

b. *Creo que nunca no viene nadie.

Rivero (1977 : 23) は以下の例を示して、TNに関してのみ新たに「否定語は二つ続いてはならない」と「主節に否定語がある時は従属節にある否定語が主節に移動することは不可能」という二つの制約を立てている。

(38) a. Los jueces no creen que el equipo ruso no gane.

b. *Los jueces no no creen que el equipo ruso no gane.

Rivero (1977 : 23)

(38b) が非文の理由は、複数の否定語が動詞の前に置かれているためである。従って、上記のRiveroの制約は冗長的であり、TNのみならず、動詞の前に置かれる否定語は原則として複数あってはならない、という制約だけを立てればよい。更に以下の文を参照。

- (39) a. No creo que nadie venga.
b. Nunca creo que nadie venga.

- (40a) a. *Creo que no nadie viene.
b. *Creo que nadie no viene.

(39a) は従属節でno以外の否定語が動詞の前に置かれている例、(39b) は主節と従属節の両方でno以外の否定語が動詞の前に置かれている例である。(39) は二重否定であり、(39a) は「誰も来ないとは思わない」(即ち論理式では「誰か来ると思う」と等価)、(39b) は「誰も来ないとは決して思わない」(同様に論理式では「誰か来ると常々思う」と等価)と解釈される。これらも(40)が示すように従属節に主節の否定要素を出現させることが出来ないため、TNが適用できない。

更に以下の文を参照。

- (41) a. ??No creo nunca que nadie venga.
b. ??No creo nunca que no venga nadie.
(42) ??No creo nunca que venga nadie.
(43) a. No creo que nunca venga nadie.
b. Nunca creo que no venga nadie.

(41) と (42) はインフォーマントが一様に戸惑いを見せた。これは否定語が一つの文に通常以上に多くあることから、極性の判断が容易に下せなかったためと思われる。しかし原理的に考えれば、(41) は主節も従属節も共に否定極性を持つので、TNの適用を受けない(即ち非TN文)である。(42) は主節が否定環境、従属節が肯定環境であるが、(41) とは意味が異なるので、非TN文である。(42) は「誰かが来るとは決して思わない」(全体としては否定文)、(43a) は「決して誰も来ないとは思わない」¹³(全体としては二重否定文)、(43b) は「誰も来ないとは決して思わない」(全体としては二重否定文)である。

以上の文例に共通する点は、一見否定語が従属節に出現しているように見えても、それらが動詞の後にある場合は「TPNとして働く否定語」であり、

最小量を表す表現と同じくTPNの特徴を持つ¹⁴。

3. TNの意味的側面

本節では、TNの意味側面、特に動詞の性質について論じる。動詞の性質からTNを許容する動詞と拒絶する動詞があることは既に1節で述べたが、具体的にどの動詞が（ないしはどの性質を備えた動詞が）TNを引き起こすのかを一般的に提示することは難しい¹⁵。まず、TNを拒絶するとはどういうことか、再考する。

- (44) a. 私は、君が来ないのを残念に思う。
b. 私は、君が来るのを残念に思わない。

- (45) a. I claimed that no one had come.
b. I didn't claim that anyone had come.

太田（1980：518）

- (46) a. María entiende que Luis no es un donjuán.
b. María no entiende que Luis sea un donjuán.

(44) ～ (46) のペアは、従属節にある否定要素を主節に移動させると真理値が異なる。このように、TNの操作を適用すると文全体の意味が変わりうる動詞を「TNを拒絶する動詞」とする。

Bosque（1980）及びSánchez López（1999）はHorn（1971：120）からの引用として、TNが適用される動詞を信念、意図又は意志、認識的近似性に三分類しているが、そこに分類されうる動詞odiarやdetestarはTNを拒絶する。更に、G. Lakoff（1970：30）はTNを許容する動詞を「橋（bridge）」と呼び、「思う、思われる、～らしい」といった認識的（epistemic）な意味を表す動詞と「～したい、～するつもりだ、～のがよい」という義務的（deontic）な動詞に大別している¹⁶。だが、認識的・義務的意味を持つ動詞の中にもTNを拒絶するものがある。

本稿では、①非叙実述語に代表される従属節が前提を持たない述語、②主節の動詞が目的語の位置に補文標識queを伴う名詞文が導かれにくい述語、

③話者の価値判断が入りにくい述語、の条件を満たすと、その述語がTNを許容する傾向にあると仮定する。

非叙実述語 (predicados no factivos) とは、その補文が真であることを話者が明言する認識的な動詞である。(47) と (48) が示すように、叙実述語では従属節の否定要素を主節に移動させると、前提となる従属節の極性が否定から肯定に変化するため、全体として命題の真理値が変化する。一方、(49) の非叙実述語 *creer* はTNが適用されても全体としての真理値は変わらない。

(47) a. Es posible que Juan no venga.

b. No es posible que Juan venga.

(48) a. Es necesario que Juan no lea ese libro.

b. No es necesario que Juan lea ese libro.

Sánchez López (1999 : 2612)

(49) a. Juan cree que su mujer no tiene fiebre.

b. Juan no cree que su mujer tenga fiebre.

但し、同じ非叙実述語でもその従属節を前提とする場合はTNを許容するが、そうでない場合はTNを拒絶する。

(50) a. No creo que venga. [TN]

b. *No estoy creyendo que venga. [no TN]

(51) a. No creo que lo entiendas. [TN]

b. *A veces no creo que lo entiendas. [no TN]

Sánchez López (1999 : 2612一部改)

従って、非叙実述語でもTNを拒絶する動詞があるが、それは動詞が認識的かどうかというよりも、その従属節に出現する命題が前提となっているかによる差異のように思われる¹⁷。

②は補文標識の性質に関する条件である。英語もスペイン語も、従属節に補文標識 *that* / *que* を取るかどうかは主節の動詞の性質によって決定されるが、不定詞を取るか補文標識を取るかは文脈に依存する場合もある。英語では不定詞を取る方がTNを許容する傾向にあるが、スペイン語でも同様に補

文標識を取らない（即ち不定詞を取る）方がTNを許容する傾向にある。即ち英語では（52）と（53）が示すように補文標識thatを導かない場合が「橋」になる傾向が強く、スペイン語でも補文標識queを導かない場合が「橋」になりやすい。

(52) a. *It isn't possible that he will arrive until midnight.

b. It isn't possible for him to arrive until midnight.

(53) a. *It isn't certain that he will arrive until midnight.

b. He isn't certain to arrive until midnight.

Horn (1978a : 159-160一部改)

(54) a. *Quiero que yo coma una tostada.

b. Quiero que él coma una tostada.

(55) Quiero comer una tostada.

(56) a. Repito que lo haces muy bien.

b. Repito que lo hago muy bien.

c. *Repito hacerlo muy bien.

Rivero (1977 : 20-21)

動詞quererは（54a）が示すように主節の主語と従属節の主語が同一指示表示で結ばれる時に補文標識queを取ると非文となる（（54b）は主節の主語と従属節の主語が同一指示表示で結ばれていないことに注意）。従って（54a）は（55）のように不定詞を伴って現れる必要がある。しかし、動詞repetirは（56）が示すように、②の条件を満たしていないため、主節と従属節の主語が同じ場合でも（56b）のように補文標識queを持たなければならない、（56c）のように一つの節とすることは許されない。即ち、（57）が示すようにquererは「橋」になりやすく、（58）が示すようにrepetirは補文標識をとる傾向にあるため、「橋」になりにくい。

(57) a. Quiero que no llames.

b. No quiero que llames.

(58) a. Repito que no lo haces muy bien.

b. No repito que lo hagas muy bien.

③の条件は①を補完するものであり、(59) のser posibleや (60) のser evidenteなどは話者の価値判断が大きいためにTNを拒絶する。一方、(61) のcreerは話し手が「考えていること」を伝達するが「どのような意図を持って考えているか」という情報は非常に少ないため、TNを許容する。

(59) a. No es posible que hagas lo que dicen.

b. Es posible que no hagas lo que dicen.

(60) a. No es evidente que hagas lo que dicen.

b. Es evidente que no hagas lo que dicen.

(61) a. No cree que hagas lo que dicen.

b. Cree que no hagas lo que dicen.

それぞれ (59) と (60) のペアは真理値が異なるが、(61) のペアは同じである。「話者の価値判断」とは、その発話をするによって話者がどのような意図を持っているかを表明する尺度を示す基準のことである。このように、話し手の心的意図性とでも呼ぶべきものが弱い動詞がTNを許容する動詞ということになる。

Horn (1978a : 194) は、話し手の心的意図性が弱い動詞を「中間尺度 (mid-scalar)」と呼び、TNを許容する述語の条件に挙げている。「中間尺度」の述語とは、認識や義務の度合いが弱いbe possible, permitのような述語と、その対極にある認識や義務の度合いが強いbe clear, be obligatoryのような述語の中間に位置する動詞のことである。即ち、認識や義務の尺度が極端な場合、極性が変化することでその意味が別の一極端に移動するため意味変化が大きい。しかし、中間尺度に位置する述語は極性が変わっても意味の変化は小さい。¬possibleとpossible¬の差は大きい、¬tener tendenciaとtener tendencia¬の意味の差は僅少である。即ち、話し手の価値判断を豊穡に備えている述語は極性変化による意味の揺れが大きい、そうでない述語は意味の揺れが小さく、真理値が等価であることを条件とするTNを許容しやすいということである¹⁸。

更に、述語がTNを許容するかどうかは言語差と個人差があることを指摘しておかねばならない。例えばwantは橋になれるが、同じような意味を持つdesireやwishは橋になれず、guess, anticipateが橋になるかどうかは個人差がある。スペイン語も同様に、quererは橋になれるが、desearは橋になれない。Horn (1978b : 183-197) によると、言語差の観点からは、英語のhopeは橋にならないが、ドイツ語のhoffenは橋になる。

TNを許容するかどうかは状況によっても左右される。例えば、ある絵を描いた生徒が誇らしげに先生にその絵を見せている状況で、先生の生徒への反応が (62a) は適格だが、TNが適用された (62b) は不適格となる。これは、(62b) が肯定文であるcreo que está malを前提とした命題を否定しうるためである。

(62) a. Creo que no está mal. Estoy de acuerdo contigo.

b. #No creo que esté mal. Estoy de acuerdo contigo.

Bosque (1980 : 61)

同様の例として、誰かに時間を訊かれた際に、たまたま時計を持ち合わせていなかった場合、(63a) は適格だが、(63b) は不適格である。

(63) a. Creo que no han dado (aún) las dos.

b. #No creo que hayan dado (ya) las dos.

Bosque (1980 : 61)

更に、(64) の質問に対して、TNが適用されない (65a) は適格だが、TNが適用された (65b) の返答は不適格となる。

(64) ¿Por qué se retrasa la boda?

(65) a. Es que creo que no ha llegado la novia.

b. #Es que no creo que haya llegado la novia.

Bosque (1980 : 61一部改)

このように、返答という前提では、TNが適用されると否定の作用域が前提にまで及ぶことがある¹⁹。

4. 否定の移動の語用論的側面

さて、もしTNを適用した文とTNを適用する前の文が等価であるとするならば、何故敢えてTNという操作を設ける必要があるのか、という語用論的問題がある。

TNの適用前と適用後の意味の差異については既にCornulier (1973 : 50)、Horn (1975 : 287)、Bosque (1980 : 62) やSánchez López (1999 : 2613) で指摘されているように、以下の文がある²⁰。

- (66) a. No quisiera ser alcalde.
b. Quisiera no ser alcalde.

Sánchez López (1999 : 2613)

(66b) は「自分が既に市長である」という前提が強調され、市長という職から脱却したいと発話しているのに対し、(66a) は「自分が市長であること」を前提とはせず、市長という職には就きたくないと発話していると解釈できる。更に以下を参照。

- (67) a. No quisiera haber nacido en el siglo pasado.
b. #Quisiera no haber nacido en el siglo pasado.
(68) a. No quisiera estar en su pellejo.
b. Quisiera no estar en su pellejo.

Sánchez López によると、(67a) は「前世紀に生まれた」という命題を前提としていないため適格であるが、(67b) は「前世紀に生まれた」という命題を前提としているため不適格である²¹。(68a) はそんな立場に陥りたくないと他人事のように話しているが、(68b) は自分自身がその立場にいて、早く脱却したいと願っている表現である²²。

Bolinger (1950) はTNが適用された文（即ち、否定語が主節に移動した文）の方が、可能性や確信性が下がると指摘し、また、著者が2名のインフォーマントに意識調査した結果も同様であった。

- (69) ¿Ha venido Juan?
(70) a. Creo que no.

b. No creo.

(71) a. Yo creo que no.

b. *Yo no creo. (gramatical en un sentido irrelevante aquí)

Bosque (1980 : 51)

(69) に対する返答は (70a) と (70b) の二つの可能性があるが、Bosque は (70a) が (70b) に比べて信念の度合いが高いとしている。従って、主語を強調するために主格代名詞を明示化すると、(69) の返答に (71b) はふさわしくないと主張する。しかし、(71a) が状況によって許されるため、容認度の判定基準としては明確ではない。むしろ、省略された文や従属節の法を調べることで確実性の変化が分かる。

(72) a. Creo que Juan no ha venido.

b. No creo que Juan haya venido.

c. No creo que Juan ha venido.

(72a) の従属節が直説法であるのに対し、(72b) の従属節は接続法である。一方 (72c) の従属節は直説法になり、上田 (2002:9) に従うと、(72c) は「ファンが来たと思わない」というように、対比の「は」が出現しない、確実性のある断定的な表現となる ((72b) は「ファンが来たとは思わない」となる)。接続法は不確実さや仮現を示す指標であり、(72) の法の観察から、話者の不確実さの度合いや心的態度が推し量れる。(72b) のNo creo queは、(72a) のcreo que noに比較して、和らげられた、信念の弱い言語表現であると言える。

TNが「和らげられた」表現であるということは既にSheintuch & Wise (1976) や太田 (1980 : 522) でも指摘されている。即ち、否定要素が左方移動すればするほど (即ち繰り上げられると) 話者の確信度が減じ、より和らげられた表現になる。

(72) a. No creo que venga nadie, pero a lo mejor me equivoco.

b. ?Creo que no viene nadie, pero a lo mejor me equivoco.

(73) a. I didn't miss anyone. But I suppose that I could be wrong.

b. ?I missed no one. But I suppose that I could be wrong.

太田 (1980 : 371-372)

(72a) と (73a) は話者の確信度が低いため pero / But を後続させることができるが、(72b) と (73b) は話者の確信度が高いため、pero / But を後続させると容認度が下がる。

否定要素が左方移動するということは、その焦点となる従属節からより離れることを意味する。ある表現の認知的・物理的距離に応じて話者の心理的距離が遠くなることは、以下の文からも分かる。

- (74) a. I think she's unhappy.
b. I think she's not happy.
c. I think she isn't happy.
d. I do not think she's happy.
e. I don't think she's happy.

Horn (1989 : 316一部改)

(74d) と (74e) は、それぞれ (74b) と (74c) に TN を適用した文である。従属節に否定要素がある (74a) ~ (74c) の場合、形態的に否定要素が述語に組み込まれている (74a) の方が、否定要素が述語と離れている (74b) よりも否定の度合いが強い。また、物理的に否定要素が形容詞、動詞、短縮形 (contract) にあるかによっても否定の度合いは異なる。記号と意味の距離の相関関係から、否定の度合いは (74e) から (74a) に行くに従って強くなる²³。

5. 結語

本稿では主にスペイン語の TN について、その理論的側面を論じた。統語論的側面を Rivero (1977) を中心に概観し、その問題点を指摘した。また、先行研究では積極的に触れていなかった、TN における主節と従属節の極性についての考察を行った。その上で、①従属節を前提とし、②補文標識 que を取りにくく、③話者の価値判断が少ない動詞が TN を許容しやすい動詞の

統語的・意味的特徴であることを見た。特に③の特徴はTNを許容するか否かの重要な指標ではあるが、明示的かつ体系的に動詞を分類させるのは今後の課題となる。

更に、TNは言語差や個人差があり、語用論的にはより和らげられた表現を表す際にTNが用いられることを見た。これは、否定要素が否定のターゲットから、TNによってより離れることで生じる認知的な効果である。今後、文脈の効果と社会的な背景を基にしたTNの研究を課題とする。

参考文献

- 安藤貞雄他編. 1993. 『生成文法用語辞典』 東京：大修館書店.
- Austin, J. L. 1962. *How to Do Things With Words*. London: Oxford University Press.
- Bach, E. 1979. Control in Montague Grammar. *Linguistic Inquiry*, 10 (4) , 515-531.
- Bolinger, D. 1950. The Comparison of Inequality in Spanish. *Language*, 26 (1) , 28-62.
- Bosque, I. 1980. *Sobre la negación*. Madrid: Cátedra.
- Cornulier, B. 1973. Sur une règle de déplacement de négation. *Le français moderne*, 41(1), 43-57.
- 出口厚実. 1995. 「表現15 否定」山田善郎監修『中級スペイン文法』547-555. 東京：白水社.
- 福嶋教隆. 1995. 「第18章：動詞-法」山田善郎監修『中級スペイン文法』332-351. 東京：白水社.
- Green, G. M. 1974. *Semantics and Syntactic Regularity*. Bloomington: Indiana University Press.
- Hooper, J. B. 1975. On Assertive Predicates. Kimball, J. P. (ed.) *Syntax and Semantics* (Vol. 1, 91-124) . New York: Academic Press.
- Horn, L. 1971. Negative Transportation: Unsafe an Any Speed. *CLS*, 7, 120-133.
- Horn, L. 1975. Neg-Raising Predicates: Toward an Explanation. *CLS*, 11, 279-294.
- Horn, L. 1978a. Some Aspects of Negation. Greenberg, J.H. (ed.) *Universals of Human Language. Syntax*. (Vol. 4, 127-210) . Stanford: Stanford University Press.
- Horn, L. 1978b. Remarks on Neg-Raising. Cole, P. (ed.) *Syntax and Semantics. Pragmatics* (Vol 9, 129-220) . New York: Academic Press.
- Horn, L. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. 1970. *Irregularity in Syntax*. Holt: Rinehart and Winston.

- Lakoff, R. 1969. A Syntactic Argument for Negative Transportation. *CLS*, 5, 140-147.
- Lindholm, J. 1969. Negative Raising and Sentence Pronominalization. *CLS*, 5, 148-154.
- 太田朗. 1980. 『否定の意味-意味論序説』東京：大修館書店.
- 大塚高信他編. 1982. 『新英語学辞典』東京：研究社.
- Pollack, J. M. 1976. A Re-Analysis of Neg-Raising in English. *WPL Ohio*, 21, 190-239.
- Rivero, M. L. 1970. A Surface Structure Constraint on Negation in Spanish. *Language*, 46, 640-666.
- Rivero, M. L. 1977. *Estudios de gramática generativa del español*. Madrid: Cátedra.
- Ross, J. R. 1969. Guess Who? *CLS*, 5, 252-286.
- Sánchez López, C. 1999. La negación. Bosque, I. y Demonte, V. (dir.) *Gramática descriptiva de la lengua española* (Vol.2, 2561-2634) . Madrid: Espasa.
- Sheintuch, G. & Wise, K. 1976. On the Pragmatic Unity of the Rules of Neg-Raising and Neg-Attraction. *CLS*, 12, 548-557.
- 上田博人. 2002. 「日本語の「は」とスペイン語の接続法」『日本語学』 Vol 21, 7, 1-12.

¹ TNについては多くの先行研究があり、普遍的なものとしてはCornulier (1973)、Horn (1975)、太田 (1980: 499-550)、スペイン語についてはRivero (1970)、Bosque (1980) 等が挙げられる。TNは伝統的にはSánchez López (1999) らが用いているように先取りの否定又は先行の否定 (negación anticipada) と呼ばれてきた。本稿では統語的な意味での移動 (transporte) のみではなく、意味的、語用論的な意味も含めて上記の術語を用いる。なお、術語については文献によって様々であり、太田 (1980) は「否定辞繰り上げ」、大塚 (1982) は「否定要素搬送変形」や「否定要素繰り上げ変形 (neg-raising)」、出口 (1995: 553) は「否定の上昇」という術語を用いている。

² 以下、特に出典を明記していない例文は筆者が作成し、2名のネイティブスピーカーがチェックをしたものである。

³ TN適用後の文と適用前の文のいわゆる意味の類似性の基準として、本稿では「命題真理値」を取り上げる。「(命題) 真理値が等価」とは、ある二つの表現が同じ事象を表す、と述べているだけであり、語彙的ニュアンスの違いとは意を異にする。

⁴ 福嶋 (1995:341) は (4) のように従属節が直説法をとる場合「主節が否定文で主語が一人称以外の場合、話し手の視点を混入することがある」と説明する。また、上田 (2002: 8-9) は、対比の「は」とスペイン語の法を関連付けて論じている。上田によると、主節に否定語がある時、従属節が接続法ならば「主語の視点のみ」を伝え、従属節が直説法な

らば「(主語で示された人物は…と思わないが) 私はそう思う」という意味になるとして、(3b) と (4) を以下のように訳し分けている。

- (i) a. 彼は彼らが来るとは思っていない。
- b. 彼は彼らが来ると思っていない。

上田 (2002 : 9一部改)

⁵ 以下の文に見るように、en absolutoは否定環境にしか生じ得ない。

- (i) a. No me gusta tu casa en absoluto.
- b. *Me gusta tu casa en absoluto.

Rivero (1977 : 27)

しかし方言的な用法では、時にen absolutoは肯定環境にも生起することがある。本稿では方言的な用法の存在を認めた上で、規範的とされるen absolutoの否定環境のみの生起を議論の柱としたい。

⁶ Pollack (1976 : 196) も同様にTPNのneitherがTNの変形後の従属節に出現するため、基底構造に否定要素が存在すると主張している。

- (i) I don't think the Phillies will win and neither will the Mets.

⁷ Ross (1969) は、更に間接疑問縮約変形 (sluicing) という現象から、TNが変形であり、基底構造では従属節に否定要素が存在すると主張する。

- (i) I don't think he's coming and I can guess why not.
(why not = why he's not coming)

why notにはI don't thinkという主節が含まれないことに注意。同様にR. Lakoff (1969) は (ii) に見られるように、肯定の付加疑問がTN文に後続するため、従属節に否定要素があるはずだと主張する。

- (ii) a. I don't suppose that the Yankees will win, will they?
 b. I suppose that the Yankees will not win, will they?

⁸ (27b) の省略された命題は、主節も含めたno creo que María se vaya de vacaciones.という読みも可能である。

⁹ 伝統的生成文法では、代名詞化が解釈部門で行われる場合、c統御の概念を適用することが一般的なように思われる。しかし、c統御説は語順の前後関係を無視していること、表層構造におけるc統御だけでは指示関係が説明できないことなどが問題となる。

¹⁰ この循環適用の説明原理も、既にHorn (1971 : 121) が指摘している。

- (i) a. I don't believe John wanted Harry to die until Saturday.
 b. *I don't want John to believe Harry died until Saturday.
- (i b) のbelieveは起動的な意味を持つため、循環適用が不可能である。

¹¹ 現行では否定の作用域及び代名詞化は解釈部門でなされるという論がスタンダードとなっているが、変形生成文法の研究が盛んだった1970年代にも、Horn (1975) など意味解釈からTNを分析した研究は存在する。いわゆる解釈意味論では、変形とは逆に主節にある否定要素が従属節に移動する（否定が繰り上がるのではなく、繰り下がる）と主張するが、それがどの程度TNの分析に貢献しているか疑問である。

¹² (34a) にTNが適用されると、以下の文が出現する可能性もある。

(i) No cree que venga nunca nadie.

(i) はnuncaに含まれる意義素「決して」が従属節に留まったまま否定要素が主節に移動した表現であり、「彼は決して誰も来ないと思う」のようにより (32a) に近い意味を持つ。この時、主節に移動するのは従属節に出現する否定語nuncaの否定要素だけである。(i) の主節に否定要素noが移動すると、nuncaが動詞の前に留まることができず、動詞の後に移動する(動詞に後続するnadieは否定要素を持たない)。よって、否定語から否定要素を「抜き取る」とTPNになる傾向があると言える。

¹³ (43a) の「決して」という副詞の焦点は「誰も来ない」という解釈になることに注意。

¹⁴ 否定語がTPNとして振舞う場合と最小量を示す表現がTPNとして振舞う場合、更に hastaやtodavíaなどでは従属節に出現可能かどうかは異なる。一般的な傾向として、TNにおいても強い否定語には弱いTPN、弱い否定語には強いTPNを要求すると思われる。

¹⁵ 動詞の性質によるTNの先行研究として、Austin (1962) の発話行為からの分析の他、Bolinger (1950)、Horn (1975)、Bosque (1980)などを参照。

¹⁶ 「橋 (bridge)」という用語は、ある要素をブロックしうる「島 (island)」の対極の概念として作り出されたものである。従って「島」の動詞はTNを拒絶するということになる。

¹⁷ TNを許容する更なる条件付けとして、Sánchez López (1999 : 2612) は意味的には realizativo (実現的)、即ち、動詞の行為を実現させられる述語、統語的には進行形でないケース、認識的な解釈になるケース ((51b) は a veces の出現により認識的な解釈にならない) を挙げている。畢竟、これらの条件付けも従属節の (実現の) 前提をしているという点で、本稿の主張と似る。

¹⁸ 同様の議論として Hooper (1975 : 92) を参照。

¹⁹ Green (1974 : 20) もTNの適用が状況に応じて変化すると指摘している (下の例文は本稿註10の再掲)。

(i) a. I don't believe John wanted Harry to die until Saturday.

b. *I don't believe John to believe Harry died until Saturday.

(i b) の二番目に出現する believe はこの状況では accept the claim that の意味になるため、TNが適用できない。

²⁰ Cornulier (1973) の観察によると、以下のような返答が可能なことから、TNの適用前と後では意味が異なると主張するが、これは語用論的な差異であり、狭義の意味論的差異(即ち、真理値の差異)ではない。これは、Cornulierが生成文法の立場を否定し、語用論的な議論を土台としたことに起因する。

(i) a. ¿Te gusta ir con él?

b. No, no me gusta ir con él. Es más, me gustaría no ir con él.

²¹ なお、この例文が提示されたのが1990年代なので、前世紀とは19世紀を指す。

²² これらのTNの意味変化は、主節の主語が有生という共通点がある。

(i) a. Este clavo no quiere entrar.

b. ?Este clavo quiere no entrar.

(ii) a. Hoy no quiere llover.

b. *Hoy quiere no llover.

(i) 及び (ii) には有生の主語がないため、従属節を前提とする解釈は容認度が低下するか、非文となる。これは意味成分による容認度の低下であり、統語的な観点からは議論しづらい。

²³ Hornはこの距離関係による否定の強さを引力に例えている。